



北海道医報のあり方への思いは人それぞれあるでしょうが、一つの考えとして会員間の双方向のコミュニケーション媒体と解釈してもいいのではないのでしょうか。医師会執行部は医師会会員間の交流のまとめ役であり、それを円滑にするのが広報委員会と考えてはいかがでしょうか。医報は公文書的要素もあり報告事項などの記事は欠かせませんが、本来医報は会員のコミュニケーションの場ではないでしょうか。現在、会員の広場、投稿欄、文芸のページを設けていますが、積極的会員

双方向のコミュニケーションを求めて

—北海道医報を掲示板に—

情報広報部長 山科賢児

の声を聞く場に十分なっているとは思えません。いわゆる声なき会員、特にこれからの医師会を背負う若い会員の声を聞いてはほしい届いてもない現実もあります。残念ですが、会員の元へ送られてくるこの医報は他のダイレクトメールとともにすぐにゴミ箱行きがほとんどではないかと想像されます。実は一会員であったときは郡市医師会の会報に目を通すだけで北海道医報や日医ニュースはすぐにゴミ箱へか積読の状態だったことを告白します。

あらゆる組織への加入率が低下しているといわれています。町内会の加入率さえ落ちていく報道があります。もちろん北海道医師会の会員の組織率が落ちてきているのはご多分にもれません。日本医師会も深刻な状況です。医師会加入率低下の原因はいろいろあるでしょうが、一番の原因は医師会に入会してもこれというメリットがないからでしょう。日常診療に関する情報はインターネットから得るほうが速い時代ですし、民間の医療情報の充実振りは目を見張るものがあります。加入

率が低下すれば北海道医師会の財政は逼迫し近い将来、会員へのさらなる負担増を提示されることになるかも知れません。そうすれば、加入率のさらなる低下は免れず医師会の存続は危うくなります。また医師会費負担が医療経営に多少とも影響を与えている可能性は否定できません。負担するに見合う見返りがあれば会費負担をやめようとはしません。しかし現在会員が加入している理由は医療事故、訴訟があったとき助けてもらうために必要という考えのようです。年金、保険といった互助的な制度はなくなる時代が来そうです。そうなると医師会の存在意義を考え直さなければなりません。

一方、医師会が会員の要望、不安の解決に貢献しているだろうかと思われる、そうだと

とも言えません。構造改革が始まり金融業界、製薬業界が大きく変化したのに対し、医師会組織は医療法制定の昭和20年代と組織構造、意識は大きく変わっていません。ただ医師会への外圧もかかり始めており、そろそろ制度疲労を改革しなければ医師会の未来は明るいといえないのではないのでしょうか。

北海道医師会の活性化を望むものにとつて何ができるか考え続けてきましたが、確かに妙案はありません。しかしただ手をこまねいているだけでは解決策は見えてきませんので、まずお互いのコミュニケーションを図る場を模索しました。経験から言ってみれば何らかの形で医師会と縁ができれば意外に医師会の敷居が低くなります。そうすればお互いの顔が見えてきます。もし参加して気が進まなければ構いませんが、まず会員の方々に医師会活動へ何らかの形で参加してもらいたい。まず会員の現状と医師会への要望を聞かせていただきたい。それが広報委員会の願いです。

北海道医師会に属する郡市医師会に各一名通信員がいらつしやいます。今回皆様に北海道医報の記事の一部分担をお願いし、郡市医師会の抱える医療現場の現状、要望、不安などを報告していただきたいと考えました。また今まで医師会に縁のなかつた会員にも日常診療の現状、将来の希望などを医報を通じてお聞かせください。それを意図する企画「熊通信」が10月号より始まります。今後皆様のご協力、ご意見を心から願います。